北海道の光の情景

中屋　恵美

幼少の頃、東京から父の実家がある旭川に移り住み札幌で就職しました。仕事は商業施設を中心とした空間の光のデザイン、装飾となる特注照明器具デザイン設計と製作です。数年後に独立し、現在は札幌を拠点に活動しています。依頼があれば全国どこへでも行きますが、道内の仕事は車の移動が中心で、年間約2万キロを走ります。運転が好きなので、仕事で初めて走る道や訪ねる土地が多いのが嬉しいです。広大な北海道の魅力を日々感じています。

北海道には約554万haの森林があり、北海道の土地面積（北方領土を除く）の66%です。また、全国の森林面積の22%を占めています。（国土交通省ホームページより抜粋）日本のどの地域より空気が澄み、透明感のある美しい自然光の表情を体験できます。

光が違うと木々の緑や建物の色も違ってきます。形はなくても光から受ける空間の印象は人の感覚に影響を与えます。自然光から受ける感覚は、照明デザインに少なからず影響を与えていると思います。その空間に来た人がそこでどんな気持ちになってもらうか考えるときのデータベースにします。自然が生み出す光の情景とその時々に感じた感覚を大切にして、照明デザインをしています。印象に残る私の北海道の光の情景をご紹介します。

国道276号 羊蹄山

ニセコ周辺の観光開発が進む中、個人住宅、コンドミニアム型ホテル、旅館、ヴィラ等の照明デザインの依頼が多く、数年前から数えきれないほど通っています。世界的リゾート地になりつつある地域は人も景観も大きく変わりましたが、変わらないのは大地に鎮座する羊蹄山。四季折々、多彩な表情で楽しませてくれます。今年の春には薄暮の美しい羊蹄山にあいました。うっすらとオレンジ色の光に染まり、青みを帯びた空を背景に浮かぶ姿にしばし酔いしれました。

空間を飾る花やオブジェを光で強調してほしいという要望をよくいただきます。穏やかな空間をつくる時は、対象物の背面を明るくしてシルエットを際立て、抑えた光を正面からふわっと当てることで静かな存在感をつくります。

道道66号（ニセコパノラマライン）神仙沼

昨年、5月初旬の午前中、爽やかな青空の下比羅夫から岩内町方面へ初めて走ったパノラマライン。カーブの多い道を上っていくと森林限界が近く、山を被う木々が上へ行く程に細く縮れたような伸び方をしていて、その先に神仙沼の湿原が広がっていました。湿原は朝の日差しの中、雪の下で蓄えた生命力が溢れ出るように眩しく輝き、春の喜びを感じました。斜め45度位から差す太陽光は湿原に緑の濃淡をつくり、奥深く見せてくれます。

曇りの日は影がなく、もっとフラットに柔らくふんわりと見えていたかなと想像します。

空間では、構成される素材感をどのように表現するか、感じてもらうかを、光を当てる角度や配光、色で総合的に

検討します。例えば珪藻土の左官仕上げの壁面は、狭い配光の光を斜めから当てて小さな凹凸による影の濃淡をつくり、素材の質感を楽しんでもらえるようにします。

根室と野付半島

根室に本店を置く信用金庫の本店新築ビルに根室らしい照明をと依頼をいただき数十年ぶりに根室へ通いました。ATMコーナーと最上階の食事室に設置する特注デザイン照明の依頼です。ATMにデザイン照明と聞いたとき最初は半信半疑でしたが、「無人のATMへわざわざ来て頂く利用者の方へ感謝のこころを表したい」という当時の理事長の思いを聞いて感動しました。素敵な発想から生まれたご要望でした。現在は、根室の夕日とランタンの光のような温かみのある色のガラスで構成された特注照明がお客様をお迎えしています。

その後、札幌支店を開設された時にもATMコーナーに特注デザイン照明を設置させていただきました。

日本で最も東に位置するまち根室は、朝日も夕日もきれいでそれだけでも十分魅力的ですが、今でも忘れられないのは、子供の頃から地図上で行ってみたかった細長く伸びた野付半島での体験です。道東の遅い夏が始まった頃に依頼先の設計者の方がレンタカーで案内してくれました。日本最大の砂嘴（さし）の半島である野付半島に向かって延びる道道950号野付風蓮公園線は極めて平らで細長く、両側に海の絶景が広がっています。その日は薄曇りで、灰色の海、白いトドワラ、先端に伸びるアスファルトは荒涼とした幻想世界。やがては海水に浸食され無くなってしまうとされる儚さ、色も影もない景色がこころを引きつける不思議な感覚でした。

曇り空の日は、太陽光が雲のフィルターを通して拡散し、人や建物の影が薄くぼんやりとしています。空間でも光の陰影が少ない空間は人を少し不安にさせます。家庭でも部屋の中が均一に白い光が広がっていると落ち着きのない不安感のある空間になる事があります。

厚田村望来

オロロンラインからそれた高台へ海を見に、プライベートでも年に数回行く場所です。10月初旬の夕方、ところどころ厚い雲に被われた日本海に日が沈むまでの約1時間、燃えるようにどんどん赤く焼けた雲がゆっくりと闇に消えて行く様子を眺め、至福の時を過ごしました。

空の色は朝焼けから始まり、日が昇ると同時に薄青から白っぽく変わり、また同じように変化して日が沈んでいきます。何気ない毎日の生活は太陽光から受ける感覚と深い関係があります。例えば昼間の営業が中心のお店は、白色の光で活動的で入りやすい雰囲気をつくります。くつろぎを大切にしたお店は夕暮れのようなオレンジ色の光で温かく落ち着いたムードをつくります。生体リズムと言われる生物の時間的周期性と太陽光の関連性は現在、各研究機関で明らかになってきており、生体リズムを照明システムに組み込んだ事例も多く出てきています。近い未来、家庭も生体リズムと一体になった照明システムを取り入れることが当たり前になるのかもしれません。

照明デザインは、テーマと一体となった光環境をつくりあげることが大切です。北海道の自然は、デザイン提案にいき詰まった時にインスピレーションの光を差してくれます。

これからも出合うであろう、未知なる光の情景を思いはせて走り続けます。

中屋　恵美
有限会社イリス　代表取締役

●profile

1988年パナソニック電工（旧松下電工）北海道EC照明デザイン部署に従事。98年にイリスを設立、主に商業施設の照明設計、オリジナル照明器具のデザイン、製作、販売を手がける。99年に有限会社イリスに組織変更。現在は代表取締役。近年の主な参画プロジェクトの木古内町道の駅「きこないみそぎの郷」「木ニセコ」「AYAニセコ　ヴィラ」「工場リノベーション　EBRI」で照明学会普及賞を受賞。また、石屋製菓札幌大通西4ビル「ISHIYAショップ」、「coron 赤レンガテラス店」など商業施設の照明デザインを手がける。